OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	なぜ貧しさの中でスポーツをするのか : ホームレスワールドカップ日本代表「野武士ジャパン」の事例から
Author(s)	岡田, 千あき
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2012, 38, p. 59-78
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7008
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

なぜ貧しさの中でスポーツをするのか

―ホームレスワールドカップ日本代表「野武士ジャパン」の事例から―

岡　田　千　あ　き

目　次

１．はじめに
２．研究概要
３．ホームレスワールドカップとは
４．ホームレスワールドカップの特徴
５．結論
―なぜ貧しさの中でスポーツをするのか―
６．おわりに

なぜ貧しさの中でスポーツをするのか
－ホームレスワールドカップ日本代表「野武士ジャパン」の事例から－

岡　田　千　あ　き

１．はじめに

21 世紀に入り、科学技術の発展に伴い、一部の人々の生活向上がみられる一方、世界中で貧困問題が深刻さを増している。国連開発計画(2001)は、「3 秒に 1 人の子供が命を落としています。世界で 12 億の人々が被害を受けています。そしてその犠牲者は、毎年 2500 万人ずつ増え続けているのです。これは戦争のせいでも、天災のせいでも、不況のせいでもありません。極度の貧困こそが、この恐ろしい現象の原因なのです。貧困は、世界人口の 5 分の 1 を巻き込み、自らの才能を活かす機会や、潜在能力を十分に発揮する機会を奪っています」と述べている。貧困問題の解決に向けて様々な手段が用いられるが、その一つとして近年、「スポーツを通じた開発」が注目を集めている。

「スポーツを通じた開発」は、開発途上国の抱える様々な課題－教育、保健、紛争、民族融和、青少年教育、HIV/AIDS などー に対してスポーツを通じて取り組む活動の総称である。スポーツには、他の開発分野で成し得ない地球規模の課題の解決手段、あるいは解決の糸口としての役割が期待されており、実際の開発現場で活用される機会は増加している。しかし、現実には、「スポーツは、何らかの開発的意義を持つ」と盲目的かつ楽観的に捉えられ、科学的論究が不足していることは否めない。

そこで本研究では、全ての地球規模の課題の中心に位置する「貧困」を取り上げ、「人はなぜ貧しさの中でスポーツをするのか」を命題としてホームレスワールドカップ日本代表「野武士ジャパン」の事例を検証する。2003 年に開始されたホームレスワールドカップは、世界各国のホームレスによるフットサルの世界大会であり、ホームレス問題の根本的な解決、すなわち貧困問題の解消を目的に毎年実施されている。ホームレスが参加する本大会への出場に当たっては、「外国に行くお金があれば、屋根のあるところで寝られるのではないか」、「フットサルをする元気があれば仕事が出来るのではないか」といった議論もなされ、その具体的成果に関する検証を重ねる必要性が高い。

大会実行委員会が行った 2007 年のデンマーク大会の終了後 6 カ月時点の調査では、対象とした 381 名の大会出場選手の中で 110 人(29%)が新たに仕事を見つけ、122 人(32%)が教育を受ける機会を得た。145 人(38%)の住居環境が向上し、118 人(31%)がアルコールや薬物依存の状態から抜け出した [1)]と報告されている。

本研究では、これらの量的に示された成果の裏にある選手の具体的な変化を追うことで、ホームレスワールドカップの意義を質的な視座に基づいて検証する。参加したホームレス選手の個々の背景や活動内容、得られた成果は異なるため、ホームレスワールド

カップの意義や特性についても量的な視点のみで測ることはできない。そのため、量的研究に加えて質的で長期的な検証が必要である、との問題意識に基づき調査を行った。

2．研究概要

2.1. 研究目的

ホームレスワールドカップ日本代表「野武士ジャパン」に関わる関係者へのインタビューと参与観察及び文献調査からホームレスがスポーツ活動に参加する意味を考察する。

2.2. 研究方法

インタビュー調査、参与観察、文献調査を併用した。インタビュー調査は、2011 年 1 月 22 日～8 月 25 日の間に、①野武士ジャパンの選手および元選手 18 名、②インターンを含めた実施団体スタッフ 7 名、③コーチを含めたボランティアスタッフ 5 名、④関連団体スタッフ 4 名の計 34 名に対して、平均 70 分間、主に個別に行った。内、選手 4 名、実施団体スタッフ 2 名、関連団体スタッフ 2 名については、時間の制約から各々の属性でのグループインタビューを行った。また、選手 2 名、ボランティアスタッフ 1 名については、他の研究者と共同でのインタビューとなったため、被調査者 1 名に調査者 2 名という構成になったが、互いに以前から面識があったため、調査者の人数が多いことによる被調査者への心理的な圧迫はなかったと考えている。調査の実施地は、東京、大阪、パリが中心であり、被調査者の希望に基づいて、ビッグイシュー事務所、飲食店、練習場所などで行った。

参与観察は、月 2 回実施されている大阪地区での練習、選手選考会、パリ大会などに参加して行った。参与観察中には、インタビュー調査での質問項目以外についても被調査者と言葉を交わし、また、調査対象外の関係者からも話を聞いているため、ここから得た知見も研究結果には含まれている。

2.3. ホームレスの定義

本稿における「ホームレス」については、野武士ジャパンの派遣団体である NPO 法人ビッグイシュー基金(以下、ビッグイシュー基金)[2)]の定義を採用する。

「ホームレス」とは、一般にホームレスと呼ばれる「屋根のない状態（野宿）」＝ルーフレス[3)]状態の人に加えて、「屋根はあるけど家のない状態（ネットカフェ、施設など）」＝ハウスレス[4)]状態の人(ビッグイシュー基金、2011)を含んでいる。

ちなみにホームレスワールドカップの大会組織委員会が定義するホームレス状態、すなわち大会への参加資格は、16 歳以上の過去の大会に参加したことのない者であり、①大会開催日より 1 年以内に 3 週間以上のホームレスの経験があるか、ストリートペーパ

ーの販売で生計を立てている者、②大会開催日より 2 年以内に麻薬やアルコール依存の治療を受けている者、③過去 1 年間に亡命したもの及び亡命申請者、のいずれかである。

ビッグイシュー基金では、独自のホームレスの定義に基づいて日常の活動を行っているが、ホームレスワールドカップの選手選考の際には、ホームレスワールドカップ大会の定める資格を適用している。

3．ホームレスワールドカップとは

3. 1. 大会概要

ホームレスワールドカップは、2001 年に南アフリカで開催されたストリートペーパー国際ネットワーク(International Network of Street Papers Conference: INSP)会議においてビッグイシュースコットランドのメル･ヤング氏らによって発案され、2003 年より開始されたホームレスのためのフットサル大会である。第 1 回大会がオーストリアで開かれた後、出場チーム数は増加し続け、2011 年には 64 カ国が参加する第 9 回大会がフランスで開催された(表 1)。

表 1　ホームレスワールドカップ開催地

	開催年	都市	国	出場チーム数
第 1 回	2003	グラーツ	オーストリア	18
第 2 回	2004	イエテボリ	スウェーデン	24
第 3 回	2005	エジンバラ	スコットランド	32
第 4 回	2006	ケープタウン	南アフリカ	48
第 5 回	2007	コペンハーゲン	デンマーク	48
第 6 回	2008	メルボルン	オーストラリア	48
第 7 回	2009	ミラノ	イタリア	48
第 8 回	2010	リオ	ブラジル	64
第 9 回	2011	パリ	フランス	64

出典:ホームレスワールドカップホームページより筆者作成

ホームレスワールドカップの目的は、「ホームレス状態を社会からなくすこと、ホームレス状態にある人々が自らの人生を変えるきっかけを作ること」[5)]とされている。大会は約 1 週間開催され、大会期間中は、選手 8 名にチーム代表、監督、コーチなどを加えた 10 名分の宿泊場所、食事、交通手段などが提供される。各国の代表派遣団体は、大会開催地までの交通費(主に航空運賃)を賄う必要があるが、派遣する団体の母体は国によって異なり、ストリートペーパー販売と関連がない団体も多くみられる。

行われる競技はフットサルと呼ばれているが、表 2 に示すとおり国際サッカー連盟の

規定するフットサルとはルールが異なっている。大会は予選リーグ、二次リーグ、決勝トーナメントの 3 部構成となっており、予選、二次リーグでは勝利チームは勝ち点 3 を得る。勝ち点の合計によってリーグの勝者が決まるが、全てのチームが予選リーグでは敗退せず、予選リーグの上位チーム同士、下位チーム同士が二次リーグを戦い、さらに二次リーグの上位チーム、下位チームに分かれて決勝トーナメントを戦う。すなわち、全てのチームが予選の結果に関わらず、1 週間の大会期間中に 10 試合前後を行うことになり、細かく区分された決勝トーナメントのカテゴリー毎に優勝チームが決まる。また、大会終了時には全ての選手にメダルが授与される。

表 2　主なホームレスワールドカップルールとフットサル公式ルール

	ホームレスワールドカップ	フットサル公式
ピッチ	22m×16m	40m×20m
ピッチ表面	人工芝	木、人口材質
ゴールサイズ	1.3m×4m	2m×4m
ボール	5 号球	4 号球
競技者数	3 名+ゴールキーパー	5 名
交代要員	4 名(随時交代可能)	7 名(随時交代可能)
試合時間	7 分ハーフ	20 分ハーフ

出典:ホームレスワールドカップホームページおよび(財)日本フットサル連盟ホームページより筆者作成

3. 2. ホームレスワールドカップ 2011 パリ大会概要

2011 年 8 月 21 日～28 日にフランスのパリで第 9 回大会が開かれ(写真 1)、表 3 に示す男子 48 カ国、女子 16 カ国から 600 名を超える選手が参加した。

写真 1　2011 年パリ大会

表 3　パリ大会参加チーム

男子(48 カ国)	Argentina,Austria,Australia,Belgium, Brazil,Cambodia,Canada,Chile,CostaRica, Croatia,CzechRepublic,Denmark,England, Finland,France,Germany,Ghana,Greece, HongKong,Hungary,India,Indonesia, Ireland,Italy,Japan,Kenya,Kyrgyzstan, Lithuania,Mexico,Namibia,Netherlands, Nigeria,Norway,Palestine,Philippines, Poland,Portugal,Romania,Russia,Scotland, Slovenia,SouthAfrica,SouthKorea,Spain, Sweden,Switzerland,Ukraine,USA
女子(16 カ国)	Argentina,Brazil,Canada, Colombia,France,Haiti,India, Kenya,Malawi,Mexico, Netherlands,Norway,Paraguay, Scotland,Uganda,USA

エッフェル塔を望むシャン・ド・マルス公園にピッチが準備され、21 日朝のパレードを皮切りに試合が開始された。選手は、毎日午前 10 時～午後 6 時頃まで 1 日 1～2 試合を戦い、試合の間には各国間での交流会や練習試合を行ったり、メディアの取材を受けていた。24 日からは二次予選が行われ、その結果を元に 27 日、28 日には、上位チームより①Homeless World Cup、②Host Cup、③Dignitary Cup、④Community Cup、⑤City Cup、⑥INSP Trophy(女子は Women's Cup と Women’s Plate Cup)のカテゴリー毎にトーナメント方式による順位決定戦が行われた。

選手は、パリ市内の 3 カ所に分かれて宿泊し、宿泊施設から大会会場への移動は、公共交通機関共通のフリーパスを用いてバスと地下鉄が主であった。大会期間中、約 500 名のボランティアが試合会場内外での運営を行っていたが、各チームにも 1～2 名のフランス語に加えてその国の公用語が話せるボランティアが配置されていた。各国代表チームのボランティアは、大会会場までの誘導を行うほか、空き時間のパリ市内観光の補助も行っていた。また、怪我やその他のトラブルへの対応など活躍の場が多く見られた。

大会実行委員会は、宿泊場所、交通手段、アメニティセットを全選手に支給したほか、エッフェル塔観光、セーヌ川クルーズ、美術館・博物館チケット、フランスリーグ観戦などを準備し、チーム毎に試合の合間にパリ市内観光をできるように計らっていた。これらは連戦の中での息抜きとなり、また、チーム内、他チームとの友好を深める貴重な機会であった。また、選手は同じ宿舎の他国の選手と朝食、夕食の際に挨拶を交わしたり卓球をするなど、言葉が通じない中でも日常的に交流を行っていた。

シャン・ド・マルス公園は、パリへの観光客の多くが立ち寄る場所であり、日常から賑やかな市内の中心地である。ホームレスワールドカップは、誰でも無料で入場し、観戦できる大会であるため、各国代表チームの関係者やサポーターのみでなく、一般の観光客もピッチの両サイドに設けられた応援スタンドで歓声を送った。上位チームの試合のみでなく、下位チームの試合でも同様の応援風景がみられ、選手の動機付けとなったのはもちろん、より広くホームレス問題への認識を広める機会となったであろう。

3.3. 日本代表「野武士ジャパン」の概要

ビッグイシュー基金は、2004 年イエテボリ大会、2009 年ミラノ大会、2011 年パリ大会に日本代表「野武士ジャパン」を派遣した。大会に選手を派遣する過程において、①ホームレスの人たちに趣味・楽しみになることを通じて「希望」をつくる、②フラットなコミュニケーションの場を提供し、人とのつながりを回復する、③ゴール・勝利、ささやかな成功体験の積み重ねで「自信」や「諦めない気持ち」を生み出す (長谷川、2011) ことを目的としている。

ビッグイシュー基金は、ホームレスの人々に対する主な活動プログラムとして、①生活自立応援プログラム、②就業応援プログラム、③スポーツ文化活動応援プログラムを準備し、さらに④市民の社会参加活動プログラムを加えた 4 分野の活動を行っている。

ホームレスワールドカップへの参加は、③スポーツ文化活動応援プログラムの一部であり、このプログラムでは、「生きることへの意欲や喜び」[6]を創出するためにホームレスが主体となった同好会やイベント開催を支援している。定期的活動として、①音楽活動、②ダンス活動、③スポーツ活動があり、そのスポーツ活動の一つであるフットサル練習は、東京、大阪で平均月 2 回行われており、日常的活動の延長線上にホームレスワールドカップが位置付けられている。

野武士ジャパンは、2011 年パリ大会に 2 年ぶりに出場することとなった。3 月の東日本大震災の影響もあり、一時は参加が危ぶまれたが、パリ大会実行委員会からの日本チームの参加支援の呼びかけ、助成金の獲得、スポンサーの支援などの形で関係者の努力が実った結果、7 名の選手、4 名のコーチ、インターンを含めた 3 名のスタッフ、複数名のボランティアが大会に参加した。東京、大阪で練習を重ねた選手たちは、6 月 4 日に 12 チームが参加して行われた表 4 の選手選考大会に出場し、その後の選手選考会において 8 名が野武士ジャパンとして選抜された。

表 4　2011 年野武士ジャパン選手選考大会概要

日時：2011 年 6 月 4 日（土曜日）　13：00〜17：00
場所：トヨタ府中スポーツセンター
参加チーム数：一般 10 チーム（＋野武士ジャパン候補 2 チーム）
延べ参加選手数：101 名
見学者数：15 名
参加ボランティア数：10 名
参加スタッフ数：8 名
総参加者数：134 名
総試合数：23 試合

しかし、7 月 17 日〜22 日に実施された代表合宿を経て出発までの約 2 ヶ月の間に諸々の事情で 4 名が代表を辞退し、補欠として選考された 3 名が加わった計 7 名が大会に参加することとなった。

8 月 20 日にパリに到着した選手団一行は開会式に参加し、その後、別に設けられた会場において東日本大震災の被災地報告会を行った。野武士ジャパンの選手は、4 月にビッグイシュー基金が行った「東日本チャリティフットサル大会」[7]で集めた寄付金を元に複数回にわたって被災地でのボランティア活動 [8]を行っており、その活動内容の報告を大会本部から要請されていた。被災地の現状やボランティア活動について、写真を用いながら約 15 分の報告を行い、東日本大震災の災禍を世界に向けて発信した。

8 月 21 日から予選リーグをグループ D で、アルゼンチン(以下、カッコ内は得点、0-12)、ギリシャ(2-18)、リトアニア(2-9)、コスタリカ(0-18)、ウクライナ(1-20)と戦い、0 勝 5 敗で二次リーグに進んだ。二次リーグはグループ H で、フィンランド(1-10)、韓国(0-3)、スロヴェニア(2-12)、オーストラリア(4-8)、カザフスタン(1-9)と戦い、0 勝 5 敗で INSP

Trophy トーナメントに進んだ。8 チームで行われた INSP Trophy トーナメントでは、準々決勝でルーマニア(0-12)、下位決定戦でカンボジア(0-4)、7 位 8 位決定戦でスペイン(2-5)に敗れ、2004 年の初参加以来の悲願である 1 勝をあげることは出来なかった。

4．ホームレスワールドカップの特徴

4. 1. 国際性

ホームレスワールドカップは、2008 年開催の第 1 回大会の 18 カ国から、2011 年には男子 48 カ国、女子 16 カ国が出場する大会となった。開催地も南アフリカ、ブラジルなど多地域にまたがっており、国際的なイベントとして発展を続けている。

ここでホームレスが「外国で」フットサルを行うことの意義を考えてみたい。文部科学省は、「スポーツを通じた国際交流は、我が国におけるスポーツの普及・発展に寄与することはもとより、諸外国との相互理解と友好親善の促進に大きな役割を果たす極めて重要な意義を持つ」[9]としているが、単なる国際交流であれば、日本国内の練習や試合に外国人を招聘することで可能になる。現に東京チームから出場した選手は、外資系企業と練習試合をすることが多く、日頃から国際的な環境でフットサルを行っていた。しかし、実際にパリに赴き、64 カ国もの異なる国々の選手を一堂に集めて行われる大会に参加することは、「色んな意味で日本代表だったので重みをかんじました」(松田、2011)と言われるように、海外という環境であるからこその特別な意味がみいだされていた。

野武士ジャパンは、大会期間中に様々な国の選手との交流を行ったが(写真 2、写真 3)、石塚は、カンボジアチームとの交流後に「カンボジアの事情を聞いて、日本はまだ幸せなのかなと。彼らくらいの年齢のとき、自分は親もいて学校に通って、欲しいものを買えた。正直頑張ってと言ってよいのか分からなかったです」[10]と感想を述べている。ホームレスの置かれた状況は国や地域によって様々であるが、お互いの環境や問題を知ることは自らの状況を見つめ直すことにつながり、このことは文部科学省が示す青少年の

写真 2　ピッチ上での交流

写真 3　ピッチ外での交流

国際交流の目的とも重なっている[11]。また、他者に興味や関心を持ち、同時に自らを他者に理解してもらう重要性や困難さを認識すること、さらには、その取り組みから得た自信は、自国の社会で人間関係を築く礎となるであろう。高城の「世界各国から色々な人が集まっている」(高城、2011)という言葉は、様々な国から選手が集う場としてのホームレスワールドカップを客観的に表現したものではなく、その場の一員として自分を含めた「色々な人」を理解することができた手応えに裏付けられたものである。

さらに海外で行われるホームレスワールドカップに出場する意義として、出場までの過程を無視することはできない。ホームレスワールドカップに出場するためには、開催国を除いた選手はパスポートを取得することが不可欠であり、パスポート取得には、戸籍と住民票が必須である。多くの者が、長年行ってこなかった「身分を証明すること」が必要になるため、数年ぶりに親族に連絡を取る者も多い。野武士ジャパンの一部の選手にとってパスポートの取得は容易なものではなく、そのために大会への出場を断念した者もみられた。一方、ホームレスワールドカップへの出場が強い動機づけとなり、様々な人の助けを得て困難を乗り越える事例も見られた。パスポートの取得にあたり「身の回りの様々なことをきちんとする」(松田、2011)必要性に直面するため、この過程自体が自立への一歩につながる仕組みとなっている。

4.2. イベント性

これまでに行われたホームレスワールドカップには10万人以上のホームレスが参加した。NIKEや欧州サッカー連盟(The Union of European Football Associations: UEFA)が後援しており、世界的で大規模なスポーツイベントへと発展しつつある。大規模スポーツイベントの効果については、経済的効果を中心に検証がなされているが、他の効果として大阪府立産業開発研究所(2008)が地域の活性化の視点から、また、笹川スポーツ財団(2006)が、コミュニティの再生、地域文化の創造、人材育成・青少年育成などの社会的効果、生活の質の向上、健康増進、自己実現・生きがいの発見などの個人的効果について検討している。

ホームレスワールドカップにおいても、大会開催に伴う直接的な経済効果は、それが主目的でないとしても一定程度は見られるであろうし、ホームレスの自立を目標とする大会であるため、未来に対する投資という意味では潜在的な経済効果を有する。しかし、現時点での大会の特性からみると、大規模イベントとしての意味は、社会的効果と個人的効果に集約される。

社会的効果としては、不特定多数の人々のホームレス問題への関心を引き出し、問題の認知を促す点が挙げられる。パリ大会は、誰でも無料で観戦することができ、入退場自由という開かれた環境で行われていた(写真4)。エッフェル塔を望む公園に四方を壁に囲まれたピッチが3カ所準備され、各ピッチの両側にはスタンドが設置された。2カ所に設けられた観戦ゲートからは、一般観光客も自由に入ることができ、強豪国の試合でな

くても常に何名かの人々が観戦し、大会を通じてにぎやかな環境が保たれていた。開かれた環境は、ホームレス問題に関心を持たない人々がスポーツというフィルターを通して問題にじかに接する機会を提供した。ピッチを走る選手の姿は、時には一般的なホームレスのイメージとかけ離れており、観客は試合の応援を通じて参加している国やチームに親近感を持つ。このことは、人々がホームレス問題を「違う世界の出来事」と捉えることからの脱却を促しており、広い層に問題への関心を呼び起こす効果を有している。スポーツイベントを通じてホームレス問題や貧困問題に対する啓蒙を行うことは、他では見られない斬新な切り口であり、イベントが大規模であればある程、波及効果は大きいと考えられる。

一方、参加した選手に対する個人的効果も見られる。後に「競技性」の節で詳述するが、ホームレスワールドカップで行われているのは、フットサルに類似しているが独自のルールを持つ競技である。顕著な特徴として、個人に与えられるプレイの回数は多いが、一つ一つのプレイの時間が短いという点が挙げられる。そのため、特定の選手が目立って活躍する機会はあまりなく、全ての選手に平等に機会が与えられている。全員に活躍や成功の機会があることは同時に、失敗や恥ずかしい思いをする可能性があることでもあり、いずれにしても大観衆の前で「目立つ」経験を否が応にもすることになる。この機会を最大限に活かすかのように個性的な髪形をする選手も見られ(写真5)、大会での試合参加を自己表現の機会と捉えていることが伺える。ホームレスワールドカップの主催者のヤングは、パリ大会の開会式において「この会場に来ているあなたたちすべてが特別な存在であることを忘れないで下さい」と述べている[12)]。大会の中で各選手が観客の声援を受けて主役になることで、特別な存在としての自己を認識することは、一定程度の規模のイベントが有する効果の一つと言えよう。

写真 4　2011 年パリ大会入退場口

写真 5　個性的な選手の様子

4.3. 半匿名性

ホームレスワールドカップには出場基準があるが、これらを満たしていれば、性別[13)]、

国籍、学歴などのその他の個人的属性や背景が問われることはない。各国での選手選考の過程でも同様であり、野武士ジャパンにおいては、スポーツ経験や高度なフットサル技術も求められていない。野武士ジャパンには、ビッグイシューの販売者のみでなく他団体[14]から練習に参加した者もみられたが、練習の段階では個人情報を明かす必要はなく、パリ大会への参加に至っても必要最低限の情報以外は原則として公開されない。

スポーツの場においては、様々な個人的背景を明らかにする必要がない場合が多く、匿名の人間関係が築かれている。野武士ジャパンの日常練習においても「年齢や性別など関係なく、気楽で自然体でいられる」(田中、2011)ことや「誰とでも等しく話ができる」(大江、2011)ことがメリットと考えられており、それまでの人間関係や経歴などにこだわらない匿名の人間関係に居心地の良さを覚える者が多い。一方で、フットサルの練習には「ある程度知っている人から誘われたから参加した」(佐藤、2011)と言われるように、完全な匿名ではなく半匿名で築かれる人間関係が重要な意味を持っている。

ホームレスワールドカップ大会においても対戦チームの選手や観戦者は、親密に話をしない限り、選手の個人的背景を知ることはない。このことは同時に、観客が、ピッチ上の選手のプレイを見て親近感を持つと言っても、深い理解に基づいたものではないことを示している。しかし、ピッチ上での懸命なプレイと激しい息遣いは、観客に対して言葉を超えた「自ら」を伝える力を有している。他者に対して様々な個人的背景を見せる代わりに、真剣なプレイを通じて「ひととなりを見せる」(松田、2011)ことによって、選手間、観客と選手の間に「フラットな関係」(長谷川、2011)が構築される。多田(2011)は、ホームレスワールドカップの効果の一つに言及し、「利害や日常のしがらみ、社会的立場などを超えた人間の集まりは、今や誰にとっても必要だ。それを一瞬にして形成するツールとして、スポーツに期待されるものは大きい」[15]と述べている。

先述のイベント性とも関係するが、ホームレス問題に一般の人々の関心を引き付けることは容易ではなく、また問題への関心があっても具体的に関わることにためらいを覚える人は多い。ホームレスワールドカップを通じて築かれる半匿名の人間関係は、選手にとってはもちろんであるが、広く一般の人々にとっても真面目ではあるが期間限定で、気負う必要のない関わり方と言える。

4.4. 競技性

ホームレスワールドカップで行われる競技は、表 2 に示した独自のルールを有している。フットサルより狭いピッチを用いて各チーム 4 人の選手がプレイするが、攻撃はキーパーを除く 3 人、守備はフィールドプレーヤー1 人を除く 3 人で行われる。7 分ハーフの間、随時、選手交代が可能であるが、ベンチにいる全ての選手が 1 度は試合に出なければならない。ピッチは人工芝で作られているため(写真 6)、技術のある選手でもドリブルで突破することは困難であり、また、攻撃、守備が少ない人数で行われるため、限られた時間ではあるが、各選手が与えられた責任を果たす必要性が生まれる。ピッチの

周囲は、1.1m の壁に囲まれているため(写真 7)、ボールがピッチの外に出ることがなく、一旦、試合が開始されると 7 分間は止まることなく継続される。オフサイドやスローインがない単純なルールの下で行われているが、ピッチが狭く、壁で囲われているためにボールの跳ね返りが頻繁である。このことがスピード感や迫力を演出し、観客を楽しませると共に、サッカーやフットサルの経験者でも工夫や技術の向上が必要とされている。

各試合には 3 人の審判が付いているが、単に反則の有無や勝敗を判定するのではなく、他の競技と異なった「教育的な」役割を期待されている。このことは、「ホームレスワールドカップの審判は特殊技能である。ルールを守ることとゲームを面白くすることの間の微妙なバランスを取りながら、加えて、トーナメントの精神を遵守し、各選手の自信とモティベーション、自尊心も構築しなければならない」[16]と説明される。具体的には、試合の中で何らかの反則が起こった際に、審判が笛を吹かずに試合を続行し、反則を犯した選手に直接、指導や目配せをする場面が見られた。ホームレスワールドカップの主目的が、試合に勝つことではなく、選手一人一人の自立であるため、趣旨を理解している審判にもおのずと教育的な役割が付与されるのであろう。

ホームレスワールドカップでは、全チームが予選リーグ、二次リーグ、決勝トーナメントを戦う仕組みとなっている。これにより、試合日程が進むほど実力が拮抗したチームと対戦することとなり、勝利のチャンスが広がる。ホームレスワールドカップが勝敗を争う大会ではないことは周知されているが、勝負の要素の入らないスポーツの場において、何試合もの間、「面白さ」を維持することは困難である。交流という名目のみでの試合は、回を重ねるごとに退屈さを増し、真剣味を失わせるであろう。

写真 6　人工芝のピッチ

写真 7　壁に囲まれたピッチ

ホームレスワールドカップでは、競技としての面白さを残しながら、できるだけ「誰にでもできる」ことを目指してルールが工夫されている。競技性が適度に抑制された独自のルールは、選手個人の能力の優劣ではなく、チームとしての連携の優劣を競うという大会の目的と方向性を明確に示している。数多くの「チームとしての勝負の場」を設

けることにより、より多くの選手が目標を達成する体験や充実感を得られることは、他のスポーツ活動には見られない希有な特徴である。

5．結論 ーなぜ貧しさの中でスポーツをするのかー

本章では、概観したホームレスワールドカップの特徴と参加した選手や派遣団体の関係者、ボランティアなどの被調査者の語りからホームレス状態にある人々がスポーツ活動に参加する意義を考察する。

ホームレスワールドカップの主催者の一人であるヤングは、過去に記者としてホームレス問題に関わった経験を有している。その後も長年に渡りホームレス支援に携わっていることから、ホームレス問題に対する深い理解を持つと推測できる。すなわち、ホームレス問題を熟知した上でフットサルの世界大会を採用しており、ホームレス問題の解決の前提として、すべての参加者が大会への参加を通じて「生きる喜び」(ヤング、2011)を見出すことを期待している。実際に多くの参加者が生きる喜びや希望を持つように変化しており、野武士ジャパンの松田は、大会後に「勝ち負けはついてくるけど、やる以上は倒れるまで諦めない。自分たちは一回人生を諦めたと思っています。フットサルは人生に似ているなと。パスを繋いでゴールにもっていく。自分も止まっていたけど、ようやくパスがまわって色んな人達と繋がりだしてゴールに向かっています」[17]と述べている。

マズローの欲求段階説では、生理的欲求、安全欲求、社会的欲求、承認欲求、自己実現欲求と人間の欲求を 5 段階に分類しているが、喜びや楽しみといった価値規範は全ての欲求と密接に絡み、人が生きるための基盤である。田中らは、ホームレスとメンタルヘルスの関係を分析した上で、「ホームレス状態にある人々がスポーツを行うことが、身体の健康を取り戻すだけでなく、やる気や自信を回復し、精神的にも健康になるという個人への効果をどれほどもたらすか計り知れない」(田中ら、2010)と述べている。2011年パリ大会の選考大会に参加した選手の中には、「サッカーは生活の全て」(宮本、2011)、「サッカーとは生きがい」(高木、2011)という者もみられ[18]、一時的な楽しみにとどまらず、日々の生活に重要なやる気や自信をスポーツによって維持している様子が伺える。

しかし、個人的な楽しみや喜びであれば、アルコールやギャンブルに代表されることが多いが、その他のことからも得られる。これらと異なるフットサル活動の意義として多くの関係者が指摘するのは、楽しみや喜びを「他者と共有する」という点である。他者との繋がりを持った上で得る喜びや楽しみは、他者への共感を生み、やがては紐帯へと発展する。ビッグイシュー基金の代表の佐野は、人がホームレス状態に陥る主要因として「人とのつながりが断ち切られる」(佐野、2011)ことに言及しており、逆説的には、仕事や生活の糧を失っても他者との繋がりがある限りホームレス状態にはならない場合が多いのである。前述のようにホームレスワールドカップでは、一人一人が主役にな

る機会が設定される。自らが主役になり他者と喜びを共にすることは、人生における希望を生み、孤独感からの脱却を促す。個人的な喜びがチームとしての喜びに昇華する経験によって、他者に対する信頼が自然に形成され、他者に対する信頼の深さはそのまま強い紐帯へとつながっていく。フットサルを通じて創られた強い紐帯を持つ集団は、属する者に安心と自信を与え、この成功体験が各々の参加者に新たな集団や社会への参画に踏み出す力を与えている。

視点を変えるとこれらの他者との繋がりは、社会における自らの役割を認識する「擬似的社会体験」である。ホームレスワールドカップでは、フットサルの試合での勝利を目的とする擬似社会が構成され、主将、ムードメーカーなどのピッチの内外での個々の役割が無意識的に割り振られた。ここでは、集団の人数が限られていることから全選手が「その他大勢」になることを許されない状況であり、半強制的に何らかの役割を持つことを求められた。ホームレスワールドカップの参加者は、もちろん個人差があり原因は様々であるが、これまで社会の中で自らの役割を見出すことが困難であった者が多い。しかし、ホームレスワールドカップへの参加後に何らかの心境の変化を感じた者が多く、自らの言葉で次のように表現されている[19]。

「互いに支えあいながらぶつかりながらも一緒にできたこと感謝します。試合には負けましたがチームのよさはどこにも負けていないと信じています」(金羽木、2011)、「人の意見を聞き、自分の意見も言えるようになりたいです。自分に少し自信がつきました」(中村、2011)、「試合を重ねていくたびに、けんか、争いがありましたけど、最終的には１つのチームになりました。チームがひとつになることは難しいですが努力をすればひとつになれることを学びました」(大江、2011)、「もう少し早く個々で考えていたらもっと良かったと思います。でも最後 1 つの目標に向かう仲間であり、チームになれて本当に良かったと思います」(高橋、2011)、「この大会に参加して、あきらめない力、そして人を信用するということを学んだように思います。今後、どんな仕事に就きたいかなどは決まっていませんが、自分のやりたいことを探して、行動していきたいと思います。チームメートとはぶつかったこともありますが、色々と助けてもらって感謝しています。また会いたいです」(高城、2011)、「今後は自分から就活など積極的にして、自分の力で社会へ一歩一歩進みたいです。チームのメンバーとは今後生活する場所もばらばらになりますが、これから社会へ出て、うれしいこと、楽しいこと、悲しいことを話せる関係になりたいです」(石塚、2011)、「大会について振り返ってみると、最初はチームとしてまとまらなかったけれど、最後にはチーム一丸となることができました。本当に、ほんとうに、このチームのキャプテンでよかったと思います」(松田、2011)。

大会期間を通じて選手は、互いに負の感情を持つこともあり、これまでであれば投げ出していたかもしれない「ややこしい人間関係」の中に身を置かざるを得なかった。特殊な環境の中で試行錯誤を重ねて共に苦難を乗り越え、初出場時からの悲願である１勝はならなかったが、最終的にチームとしての充実感や達成感を得ていた。ここでは、単

なる「友人作り」や「コミュニケーション能力の向上」といった表面的なものに留まらず、日常生活を送る中では構築が困難か、あるいは時間がかかるような深い人間関係が築かれており、この強固な人間関係は、将来の自立に向けた財産となるであろう。各々の選手が、構成された擬似的社会の中で自発的に役割を見つけ、役割を果たしたという事実は、社会的存在としての自己に対する自信と他者に対する信頼の両者をもたらした。

6．おわりに

ホームレスワールドカップの意義の検証に先んじて、貧しさとは何かを再考する必要性が生じた。経済的な貧しさがホームレス問題の根本であることは確かであるが、そこにセーフティネットとしての何らかの人間関係が存在する場合、人がホームレス状態に陥ることは少ない。また、人間関係があったとしても何らかの理由で助けを求めることが出来ない場合や人間関係が断ち切られてしまった場合には、精神的に追い詰められ、自分の人生に対して投げやりになり、長期的な視点に基づいた判断が困難になる、という悪循環に陥る事例が多い。すなわち経済的な貧困への対応だけでホームレス問題が解決できないことは明らかであり、ましてや場当たり的な支援やチャリティ活動だけでは根本的な問題解決の道程を示すことはできない。

ホームレスワールドカップ大会と大会に至る一連の活動は、このようなホームレス問題の解決の難しさや個々の事情を斟酌した結果として採用された「自立に向けたきっかけ作り」のための装置である。参加する選手は、チームの一員として疑似的社会に組み込まれることにより、自身の社会的役割を見つける試行を重ねることができ、「自分はこの世界で一人きり」との考えを克服していく。この試行は他者と関わる社会的存在としての自己を認めることに繋がり、万能な処方箋ではなく方法は異なるものの、大会の終了後も各選手に将来の自立に向けた自発的活動を喚起する。

ホームレスワールドカップは、単純で分かりやすく、多くの人々が応援することのできるフットサルという競技を用いており、一見すると、人、物、お金がダイナミックに動く派手な要素を持つ国際規模のイベントである。この表面的な「派手さ」を利用して世間の関心をホームレス問題に向ける意義を持つことは言うまでもないが、同時にミクロな視点で個々の選手の事情に配慮しつつ、できるだけ多くの人に対して最も有効な問題解決の方法を模索した結果としてフットサルを採用した様子が伺える。佐野の言う「Homeless になっても Hopeless になってはいけない」という言葉は、Hope(希望)を与えるホームレスワールドカップの意義を説明するのに十分な重みを持つ。フットサルを通じてホームレス問題の解決を目指す試みは、大規模で国際的なイベントでありながら、参加する個々の選手に直接的で長期的な変化を働きかけるというチームスポーツの特性を十分に活かした希有で貴重な試みである。

謝辞
本研究の実施にあたり、有限会社ビッグイシュー日本、NPO 法人ビッグイシュー基金を始めとした関係者の皆様にご協力をいただきました。深くお礼を申し上げます。また、本研究は、文部科学省科学研究費若手研究(A)および大阪大学多様な人材活用推進本部の助成を受けて行いました。

注

1) Impact Research Copenhagen 2007 Homeless World Cup、ホームレスワールドカップホームページ http://www.homelessworldcup.org/our-impact/impact-research [2011/09/28]参照。

2) NPO 法人ビッグイシュー基金は、2007 年に有限会社ビッグイシュー日本を母体に設立された。詳細はビッグイシュー基金ホームページ http://www.bigissue.or.jp/ [2011/09/10]参照のこと。

3) ルーフレスとは、路上、公園、河川敷などで寝泊りをする野宿状態のこと。2010 年 1 月現在、全国で 13,124 人が確認されている(厚生労働省の調査結果による。ビッグイシューホームページ http://www.nobushijapan.org/ [2011/08/31]参照)。

4) ハウスレスとは、屋根はあるが家がない状態。どや、施設、ネットカフェ、サウナ、カプセルホテル、個別ビデオ店、ファーストフード店、友人宅、飯場などで寝泊りをする状態のこと。2007 年 8 月現在、全国で推計 5,400 人(厚生労働省の調査結果による。ビッグイシューホームページ http://www.nobushijapan.org/ [2011/08/31]参照)。

5) Homeless World Cup Home Page http://www.homelessworldcup.org/ [2011/08/20]より引用の上、筆者訳。

6) ビッグイシュー基金ホームページ http://www.bigissue.or.jp/activity/index.html#03 [2011/08/25]より引用。

7) 東日本大震災の被災支援を目的に 4 月 21 日に開催された。野武士ジャパンメンバーを含めた 80 名以上が参加し、100 万円以上の寄付が集まった。

8) 石巻市桃浦蛤浜において瓦礫の撤去や生活支援のボランティアを行った。ビッグイシュー販売者の有志が、土木・建築・自衛隊・飲食業などのかつての経験を活かして行ったものである。

9) 文部科学省ホームページ http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/athletic/070817/009.htm [2011/09/25]より。

10) 2011 年 9 月 4 日に行われた日本運動・スポーツ科学学会国際健康・スポーツ分科会第 9 回大会基調講演「私にとってのサッカーーホームレス問題とサッカーを考えるー」より抜粋。ビッグイシュー基金ホームレスサッカープロジェクトブログ http://ameblo.jp/one-goal-one-step/page-3.html#main [2011/09/30]参照。

[11]文部科学省は、青少年交流事業の目的を「わが国の指導者及び青少年が、相手国の青少年等との共同体験を通じ、相互理解を深め、国際性を養うとともに、自主性・創造性の育成を図る」としている。文部科学省(2000)を参照。

[12] 2011 年 8 月 20 日に行われた「ホームレスワールドカップパリ大会」開会式より。

[13] 2011 年パリ大会では、16 カ国から女子チームが参加しているが、(女子チームが参加していない国の)いくつかの男子チームにも女性が参加していた。

[14] 東京では「特定非営利活動法人自立生活サポートセンター・もやい」、「新宿連絡会」、大阪では「社会福祉法人みおつくし福祉会大淀寮」、「釜ヶ崎パトロールの会」等。

[15] 多田容子(2011)での対談内容の一部から引用している。

[16] ホームレスワールドカップホームページ “Whistles of International Friendship” http://www.homelessworldcup.org/news/whistles-of-international-friendship [2011/09/20]より抜粋の上、筆者訳。

[17] 前掲 10)日本運動・スポーツ科学学会国際健康・スポーツ分科会第 9 回大会基調講演「私にとってのサッカーーホームレス問題とサッカーを考えるー」より引用。ビッグイシュー基金ホームレスサッカープロジェクトブログ http://ameblo.jp/one-goal-one-step/page-3.html#main [2011/09/30]

[18] 野武士ジャパンプロモーションビデオ http://www.youtube.com/watch?v=-UPLI1bVH5o&feature=related [2011/09/30]

[19] ビッグイシュー基金ホームレスサッカープロジェクトブログ http://ameblo.jp/one-goal-one-step/page-4.html#main [2011/09/30]より抜粋。

文献表

Horne, J. and Manzenreiter, W.(2006)*Sport Mega-Events –Social Scientific Analysis of A Global Phenomenon*, Blackwell Publishing Ltd.

Maslow, A.H.(1943), A Theory of Human Motivation, *Psychological Review,* Vol.50, pp.370-396.

Okada, C. and Young, K.(2011), Sport and Social Development: Promise and Caution from an Incipient Cambodian Football League, *International Review for the Sociology of Sport*, Printing

UNDP(2001), *The United Nations has picked group of people to eliminate world poverty –you're one of them*－, The United Nations Development Programme.

大阪府立産業開発研究所(2008),「スポーツの視点から産業、地域振興を考える」, 大阪府立産業開発研究所資料

岡田千あき(2011),「生きる喜びを見つけるサッカーの旅」,『体育科教育』11 月号, 大修館書店, 70-71 頁

笹川スポーツ財団(2006),『スポーツ白書－スポーツの新たな価値の発見』, 笹川スポーツ財団
多田容子(2011),「多田容子がゆく－スポーツを通じた開発･国際協力」,『月刊エグザミナ』, 株式会社エグザミナ, 58-61 頁
田中暢子、岩永理恵(2010),「ホームレスへのスポーツ支援を必要とする社会的背景--ホームレス･ワールドカップに着目して」,『スポーツ精神医学』第 7 号, スポーツ精神医学会, 52-56 頁
特定非営利活動法人ビッグイシュー基金(2010),『若者ホームレス白書』, 特定非営利活動法人ビッグイシュー基金
長谷川知広(2010),「ホームレスワールドカップ 2011 パリ大会日本代表－野武士ジャパンプロジェクト応援について - 」, ビッグイシュー基金資料
稗田和博(2011),「野武士ジャパン、『ホームレス･ワールドカップ』2011 パリ大会に出場」,『The Big Issue Japan』176 号, 有限会社ビッグイシュー日本、8-9 頁
文部科学省(2000),「スポーツを通じた国際交流と青少年の国際交流」, 文部科学省資料
安田菜津紀(2009),「ホームレスがピッチを駆け抜けた日」,『アエラ』2009 年 11 月 16 日号, 朝日新聞社, 52-53 頁
與那安貴、松永敬子他(2010),「ホームレス･ワールドカップにおけるスポンサーフィットがブランドイメージに及ぼす影響」, 第 12 回日本生涯スポーツ学会発表資料

Why sport makes sense to people who live in poverty

−"Nobushi Japan" for the Homeless World Cup 2011: A case example−

Chiaki OKADA

The ninth Homeless World Cup was held in Paris from 21 to 28 August 2011. Over 600 homeless players from a total of 64 countries (48 men's teams and 16 women's teams) participated in football matches. According to the regulations of the Homeless World Cup Organizing Committee, all players must be at least 16 years old and have not taken part in any of the previous Homeless World Cup matches. Additionally, players must meet at least one of the following criteria: (1) have been homeless at some point within the preceding 12 months, (2) earn their main income as a street paper vendor, (3) be asylum seekers currently without positive asylum status or be previous asylum seekers but have obtained residency status after 1 August 2010, or (4) be currently in drug or alcohol rehabilitation and also have been homeless at some point in the previous 24 months.

The purpose of this study is to clarify the value of sport for poverty reduction using the case example of "Nobushi Japan," Japanese team that participated in the Homeless World Cup 2011. Field studies were conducted from January to August 2011, on 34 related persons, including 18 homeless players, mainly by personal interviews. Additionally I was a volunteer staff member for the Japanese team at the 2011 World Cup in Paris.

This study consists of three sections. The first section outlines the Homeless World Cup, the Paris Cup in 2011, and the activities of the Japanese team for the Cup. In the second section, I discuss the Cup, focusing on its characteristics as an "international", "world-wide mega", "semi-anonymous," and "competitive" event from the viewpoint of its benefits to players. In the third section, I consider the significances of sport as a tool, referring to the case of the Homeless World Cup.

In conclusion, the core significances of the Cup are to offer several opportunities for participating players to gain self-esteem and to establish trust with other people. Moreover, a series of activities for the Cup gave players hope and pleasure in sharing sporting experiences, and, of course, exposed the difficulties in creating personal relationships. By fulfilling their own role in the team, players gained enough confidence to return to society in the future.

The Homeless World Cup is a trial to resolve the worldwide problem of poverty from the roots using football, which provides a rare and precious opportunity to consider the value and role of sport in contributing to solving social issues.